

## 真宗における出遇いの意義

——絶望のどん底に差し込んだ智慧の光——

Michael Conway (マイケル・コンウエイ)

このたび、宗教講座にご縁をいただきまして、自分の経験、または自分が真宗の教えに触れて、どのように人生が変わってきたのかということについて、皆さんと分かち合う、共有する場を与えていただいたことに深く感謝しております。小澤先生、太田先生をはじめとして、光華女子大学の皆さんに、一言、最初にお礼を申し上げます。ありがとうございます。

小澤先生がおっしゃいましたように、私が二〇〇三年に大谷大学にやってきた時、小澤先生は先輩として博士課程で勉強をされていました。太田さんは後輩でして、学部の三回生でした。その時、僕は修士一回生として入学しまして真宗学を学びはじめました。この会に向けて、太田さんからさまざまな話を伺って、「真宗における出遇いの意義」という

ような、何か教学的で、堅めの学問ぶった題をつけていましたが、お二人から「君がジャンキーでピザばかり食べていた頃の話をして、それが真宗に出会ってどういうふうに変ったのか、話してほしい」という言葉をいただきましたので、「——絶望のどん底に差し込んだ智慧の光——」と副題をつけ加えました。

私は、お酒や薬物に依存する生活を随分長いことしていたんです。学生の皆さんと同じ年齢だった頃、正確に何年から何年までと言えないんですけども、学部生の在学期間の全部はお酒と薬物に振り回されて生きていましたね。そして、薬物とお酒と縁を切らなければ死ぬという状況に追い込まれた時に、縁を切る方法といいますが、縁を切って普通の生活をしていくために、お寺にかけ込んだわけです。そういうジャンキーだった時の話をしてほしいという依頼がありました。本当は、難しい学問の話をして皆さんを惑わす方が僕にとっては都合が良いんですよ（笑）。こんな若い時の、人生の一番辛いところをさげ出して、絶望のどん底に陥ったことがある、ということを確認たくないのが正直なところです。でも実際に、どん底に陥ったことが、非常に豊かで恵まれた精神生活への扉となったわけです。皆さんもおそらく、僕が若い時に感じていたような、恐れや生き辛さのようなものを持っていると思います。僕はかなり、そのどん底まで突っ走っていくような

状況でしたけれども、それは人間の心が持っている一つの可能性をとことん追求したからです。僕の場合は度合いはひどかったですし、対処法は下手でしたが、生きるのが怖いとか、友達に裁かれるのが怖いとか、本当の自分を前面に出せないとか、そういう屈折した思いを、きつと皆さんもどこかでされていると思います。

僕自身は、恐れとの付き合い方について人生で二つの方向を学んできました。一つは、破滅方向。絶望のどん底まで突っ走っていく方向ですね。でも、真宗の教えに出会うことよって、生きていく智慧、ものの見方、違った世界の捉え方を授かって、何とか、破滅の方向じゃない、素晴らしい精神生活が開かれる方向を知り、本当に楽しい生活を賜ったわけです。素晴らしい友人に恵まれて、素晴らしい先生にも恵まれて、「実は、お前は素晴らしい世界に生きているのだ」と、持っている恐れを手放して、目の前の事実を見てみれば、何も逃げることなく、何も絶望することなく生きられる智慧をいただいたわけです。そういう智慧について今日は皆さんにお話をしていきたいと思っています。

まず、都合の悪い（笑）、絶望のどん底の話から入っていかなければなりませんね。そこで「真宗の教えに出会うまでの経緯」を少し話させていただきます。

僕は十四人兄弟の末っ子です。アイルランド系カトリックの非常に信仰熱心な両親の元

で生まれました。十三人もの兄、姉がいて、年齢もだいぶ離れています。カトリックでは、信者を増やすためには子どもを生むのが一番手っ取り早い、カトリックの信仰を世に広めるために、「とにかく子どもを生め」という教えがあるんですが、うちの両親はそれを真に受けて、子どもを十四年間で十三人も作ったんですよ。そこから七年間の休憩を取って（笑）、僕が生まれてきました。上の双子の兄達が七歳年上、一番上の兄は二十一歳上です。何人かは大学に進学したりして巣立っていましたので、十六人全員が同じ時に家に住んでいたわけではないんですけれども、同じ屋根の下で、十三、四人の人々が暮らすと、本当にカオスになります。いろんな欲求、欲望のある十代の人たちがうじゃうじゃいるので、そこでみんなの欲求が満たされるわけがないんですね。楽しい面もありますよ。いつもパーティが行われているような賑やかさもありましたけれども、同時にすごいうるささもあります。歳を重ねるに連れて、大学進学とか、結婚とか、子どもの出産とか、人の数だけいろんなことが起こっていましたので、毎日、毎日、静けさのない生活をしていました。

僕は、十四人もの人たちに愛情をたっぷり注がれて可愛がられていましたので、社会的ニーズは満たされていたんです。けれども同時に、これはうちの兄弟の変なところなんで

すけど、大変自負があつて、傲慢さがあるんですね。周りの人を非常に厳しく裁く目を持っていて、人を悪く言ったり、周りに厳しく自分にも厳しかったので、僕は、幼稚園に入る頃から、家族以外の人と接することに難しさを感じていました。わざわざ学校に行つて友達を作らなくても、姪っ子もいるし、兄たちも、私をいじめてこない時は遊んでくれるわけですから、学校で同年代の子ともと交流しようとしなかつたんです。家族以外の者たちが何か宇宙人のように見えて、なかなか素直に関係を築いていくことができずに、幼稚園から小学校二年生ぐらいまで、ほとんどクラスメイトと口をきくことはありませんでした。ずっと黙っていたんですね。家が学校の近くにあつて、お昼御飯は家に食べるに帰つてもいいことになっていたので、家でサンドイッチを食べてまた学校に帰つたりして、昼休みはクラスメイト同士で遊ぶ時間がありましたけれども、みんながアメフトとかやっているのをいつも黙って眺めていました。家族といふ時は素顔を出せるんですけど、三、四歳ぐらいから、仲間の中に入れない、そういう思ひでいました。

それが十代の思春期になると、ますますひどくなりました。九歳から十三歳くらいまで、少し友達と遊べるようになって、少し話せるようになって、時々遊びに行くような仲間もできたんですけど、思春期の「自分がどう思われているのか」という恐れの中で、友

達に完全に正直にはなれない自分がいつもいました。正直になれない、素の自分でいられない、と同時に、「あいつはダメだ」と人を裁く目も成長していきました。年上の兄弟も人を裁くことが多かったんですね。例えば、イギリスではアメリカ文化を非難する傾向があります、一人の兄が大学を卒業してからヨーロッパで一、二年、旅をしながら、ワーキングホリデイをして、ヨーロッパの価値観を学んで帰ってくる。イギリスの大学に進学してイギリスに染まって帰ってくると、アメリカの社会、アメリカの文化を軽蔑するようになったわけです。それを、九十三歳くらいの僕は「アメリカは変ですね」と、その兄の考え方をそのまま吸収してしまいました。そういう見方をすると自分に自分の価値を見出していたわけです。本来の英語の使い方、本来の品のある文化を僕だけが知っていて、他の人は野蛮だという価値観を確立したわけです。けれど、同時にそこには恐れがありましたね。自分が高い所に立つと、他の人たちも同じような目で自分を見ているんじゃないかという恐れが生まれるんです。十代の半ばは恐れのかたまりでした。裁きの目を持つ一方で、とうてい達することができない高い理想を持っていましたので、自分も裁かれているという恐れからなかなか逃げ切れなかったんです。十代の仲間のアメリカ人にとって、イギリスの価値観なんてどうでもよかったんですけどね（笑）。

そして、そういう形で仲間にとけ込めないと悩んでいたところにお酒が入ってきたわけです。初めてお酒を飲んだ時は、飲んで、気絶して、吐いて、大変なことになったんですけど、気持ち良かったんですね。あの「恐れ」がどっかに行っちゃうんです。これほど気持ち良いものはないんじゃないか。「恐れ」をなくすためにはお酒が一番利くということと覚えて、お酒を飲むようになっていったんです。僕はアイルランド系ですから、遺伝的に依存症になる傾向があつて、十四人の兄弟のうち、すでに依存症になっている家族もいました。そういう人たちと一緒に住むと、いろんなストレスがかかってくるわけですから、またお酒に頼るようになっていったんです。

また、薬物ですが、僕が若い頃はアメリカで大麻はほとんどの所で違法でした。でも、一九五〇年以降に生まれた人は、ほぼ全員、大麻を一度や二度、吸ったことがあるわけです。僕は、大学で大麻を覚えて帰ってきた兄に、寝室で「吸う？」と尋ねられて、「はい」と答えて吸い始めたんですね。二日酔いがなくて、お酒よりもっと気持ち良いんですよ。それで高校生の時に友達の間で使うようになっていったんです。そのおかげで素の自分ではいられる時間があると感じ始めたんですね。けれど、酔っぱらって、ラリって帰ってくる、母に怒られるんですよ。十四歳、十五歳の子どもがラリって帰ってくるので当然怒ら

れますよね。それで母を恐れるようになりましたね。土曜日に友達といる数時間は素の自分を出せるんですけれども、その数時間の間にお母さんの顔も思い浮かんできて、今日はこれくらいにしよう、今日は辞めなければならぬなどとも思うようになったんです。

高校最後の年（アメリカでは四年制ですので、四年生でした）には、姉がお酒で命を落としそうな状態でしたので、自分自身の飲み方について考えるようになりました。ある金曜日の昼間に、僕は「最後に酔っぱらわなかった週末はいつだったんだろう？」と記憶を辿ったんですが、全ての飲む機会が酔っぱらっていたので、素面でいた週末は思い出せなかつたんです。そして、「自分も姉と同じ依存症になっていくんだろうな」と思いました。十七歳でした。でも、それを母に話すわけにはいかなかったですね。

それでも何とか母の歯止めのおかげで高校を卒業して、大学に入れたんですけれども、大学に入ったら、ほぼ完全に歯止めがからなくなりました。仏教で言う「餓鬼道」に陥って、お酒を飲み続ける、薬物を追い続ける、そういう欲求にかられて生きる存在となつてしまつたんです。

皆さんは仏教で言う「餓鬼」が何かということをご存知でしょうか。授業で「六道」の話はまだですかね。仏教では人間のいろんな精神生活の移り変わりを象徴するために、地



獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天という「六道」が描かれています。一つの文学的表現として人間の精神生活を象徴的に描写しています。「餓鬼」は、大きなお腹を持っていて、喉が非常に細い。常に「食べたい、食べたい」という欲求にかられているんですけれども、食べ物をお口に入れると、その食べ物が火とかに化して、自分が傷つけられる。大きな欲求を満たそうとしても、自分を傷つけてしまって、その欲求は結局満たされない。仏教では「餓鬼」がそういう存在だと言われていますけれども、私は大学生になって、自分の生活を全部自分で管理できるようになったので、飲みたい、酔いたい、若い時に得ていたあの良い気持ちになりたい、と、お酒、薬物を一生懸命に追うようになっていったんです。ほぼ全ての大学生活は、お酒、薬物を体に入れるための生活でした。

餓鬼はいろいろな仏典に出てくるんですけれども、お腹が大きくて喉が細くて、食べるのに困っている姿が一つの典型です。ある可哀想な餓鬼は、自分の頭に傷をつけてその傷口から出る血で自分のお腹を満たそうとするんですけど、飲んでいる時に、自分の持っている高い理想がどうしても傷つけられてしまいました。酔っぱらうと品良く振る舞えないんです。酔っぱらうとどうしても変なことをやってしまうわけですから、朝起きると、すごい後悔で、「今日こそ飲まない」「そんな馬鹿げたことをやるんじゃない」と自分にカツ

を入れる。けれども理想とのギャップに耐えられないので、昼過ぎには「お酒がなければ生きられない」「薬物を体に入れなければ生きられない」と、朝の固い決心が自分を圧倒する大きな欲求に変わって、毎晩、毎晩、お酒か薬物に手を出していました。

そして、そういう生活をしていると、周りの人たちがどうでも良くなってくるんですね。欲求を満たすためには他人を傷つけてもいい、どうでもいいと思えるようになりますと、本当にひどいこと、物を盗んだり、約束をすっぴかしたり、嘘をついたりするようになります。愛する彼女、愛する母に嘘ばかり言うようになったんです。「愛してる」と言いながら全然正直に話さない自分がいました。「毎日酔っぱらっている」と言うところから怒られるわけですしね。

餓鬼の描写の中で彼らの大きなお腹は何を象徴しているかということを考えてみると、恐らく「愛されたい」という欲求を指していると思います。みんなに愛されなければ私なんて生きる価値がない、そういう欲求を象徴しているんじゃないかと思います。餓鬼になってしまった僕は、そういう思いでどんな手でも使ってみんなに愛されるために動いていたわけです。でも、当然、彼女には振られますよね。ずっと嘘をついて、正直に話さないでいるわけですから、振られるのは当然です。本命がお酒で、彼女じゃないんですから。

当時、本当にいろんなことが起こりました。彼女に振られてから二日後に父が亡くなり、アルコール依存症の姉が、父が亡くなった六カ月後くらいに亡くなりました。大学の最終学年の春（アメリカの大学は六月卒業で、姉が亡くなったのが二月です）、母からその姉の話聞いた時に、「もうこれで十分でしょう」「この生き方を辞めて、ちゃんと生きなさいよ」と自分に言い聞かせました。「もうこれ以上、飲まないぞ」と決心しました。よく酔っぱらいに行っていた友人の家には姉が好きだった銘柄のウイスキーの空瓶があったんですが、その瓶を手にとって誓ったんです。三時間ぐらいその瓶を持っていたんですが、やがて抑えきれない欲求が上がってきたので、その酒瓶を外に持っていき、道端で全力で投げて粉々に割ってから、友人のところに戻って飲み始めたんですね。

日本語の授業の単位が残っていましたし、卒論もほとんど手に付かずの状態でしたが、酔っぱらう道しかなかったからです。その春は酔っぱらい続けました。そういう絶望のどん底に二年くらいいたかな？卒業の時に日本語の授業に行ってなかったですから、先生に「先生、申し訳ない。私はアルコール依存症です。学生相談所に行つて、治療もしますから、私を通してください」「試験も全部受けましますし、宿題も全部しますから、どうか通してください」と頼み込みました。そこから一週間ぐらい、一生懸命、宿題全部やつ

て、テスト全部やって、学生相談室にも行って、依存症の治療ができる施設の名刺ももらって行って、何とか情けで通してもらい、卒業できました。そして、また酔っぱらい始めました。卒業したものの、就活はほとんどしていませんでしたので、夏のバイト先に頼み込んで雇ってもらい、大学の飲み友達と暮らすことにしました。その後、結局、共同生活をしていた友人たちと、酔っぱらいの日々を続けてしまいました。バイト代は家賃と酒代で消えていきました。それで何とか暮らしていたんですけれども、ある日、五時に職場から帰ってきて、薬物を使い始めて、ソファーでラリっていく中で、今後の自分の人生が見えなくなりました。毎日毎日酔っぱらって、ずっと欲望にかられ続けて、やがて姉と同じように死ぬ。そして、その時に「早く死ねればいいな」と思ったわけです。そこで、地獄の扉が自分の上で閉まって、それまで感じたことのない絶望を感じました。

こういう精神状態は長く続けられません。薬物を体に流し込み続けると心身共に壊れていきます。僕は、地獄の扉が閉ざされて、いうほど時間が経たないうちに、心身共にポロポロになって、精神病院に入院せざるを得ない状況になりました。精神病院の閉鎖病棟で、自由を全部奪われて、外の芝生を眺めながら、「自分の今までの生き方が、ここに辿り着いた」「今までの生き方はダメだった」「繰り返し返さないように生き方を変えなきゃ」と

思ったんです。でも、自分で自分の生き方は変えられない。自分の最大の努力の結果が「ここ」だったから、助けが必要だと思ったんです。精神病院ですから、ケースワーカーさんや、いろんな人たちがいたので、「これ以上嫌です」と話しました。社会は素晴らしいもので、人々が苦しんで助けを求めようとすると、いろんな形での手助けがあるんです。カウンセリングに行ったり、自助グループに行ったり、同じような悩みを抱えている人たちの中に入っていて、あの手、この手を使って、この問題の解決に取り組みたいと思うようになりました。精神病棟の窓越しの芝生を見ていた時に決心がついたわけです。

それで人生を立て直そうとし始めるんですけども、やはり絶望のどん底で心身共に壊れているわけですから、病院の外へ出ていったからといって、そう簡単に問題がなくなるわけではありません。全てのものに愛されたい気持ちもなくなっていないですし、高い理想もなくなっています。なくなったのは麻痺のために使っていた薬物だけです。ものすごい苦しい精神状態の中で、精神病棟から出てきて、あの手、この手を使いながら、何とか人生を軌道に乗せ直そうとしていました。でもまあ、上手くいかないんですね。深い鬱状態にも入っていて、職場にも約束通りに出勤できない状態でした。朝、起きられないからです。体と心を治すために飲んでる薬にもすごい副作用があって、毎日十六時間寝

ないと活動できない状態が年単位で続きました。お酒と縁を切っても、二年ぐらいはどんなから出られなかった。ずっと持っていた「恐れ」がまだあったんですね。

社会から提供されている様々な手助けに頼りながらも、やはり根本的な悩みの解決にはなりませんでした。そして、いろんな、あの手、この手を使っていくうちに、仏教のお寺に出会ったんです。キリスト教はもう嫌でした。こんな苦しい世界を作った神なんて信じられないと、キリスト教に帰ろうとは思わなかったんです。姉を奪い取る神なんて信じられるものじゃないですよ。そういう恨みの中で生きていました。仏教は瞑想するだけで心の平安が得られる、そういう教えだと考えていましたので、瞑想がしたいと思ってお寺に通い始めました。でも、こんなひどい精神状態の人を瞑想させちゃダメですよ。ただ自分の心を傷つけ続けるわけです。「こんな人生を作り出したのはこのクソ人間だ」(笑)というようなことしか思い浮かんでこない。思いを消そうとしてもできないんですけど、幸いにお寺は禅宗でなくて真宗のお寺だったんです。

真宗で一番大事にするのは、教えを通して、ものの見方を変えろということ。真宗は「南無阿弥陀仏」を大事にしています。先生方から、自己中心的な欲望をどこまでも満たそうとする破滅の方向から違う方向へ行きなさい、というメッセージを示していただき

ました。それを聞き開いていく中で、あの「恐れ」に囚われなくていいんだということを読んでいったわけです。お寺に通い始めても生活は以前のまま、教えを聞くからといって、外的な状況は何も変わらないんですよ。体もそんなにすぐに治らないし、心も一瞬にして治るものじゃないですから、アルバイト先に遅れて行ったりしながらも、お寺に通っていました。でも、お寺で聞く話、お寺で触れる人々が何かホッとさせたんです。ホッとさせるだけではなくて、次の一步を踏み出せたんです。その人々は僕の中にそういう力を呼び起こした。そのような力をいただきました。それは何故かというと、そこの方々は一つ大事な智慧を持っていたからです。仏教ではいろんな智慧があると言われますけれども、資料に三つの智慧を示しました。

まず、「自分を知る智慧」です。自分が何かはつきり見える、そういう智慧です。それをお寺で教えてもらいました。それが「南無阿弥陀仏」でいう「南無」のことです。南無は頭を下げるという意味ですけど、自分の、ああしたい、こうしたい、という思いを、さておく、ということですよ。僕は恐れにかられて生きてきました。ずっと愛されたいと思って動いていました。本当の自分は誰も愛してくれないだろうと、仮面をかぶっていなければ、また、お酒の力を借りて生きていかなければ本当の自分を出せないだろう、という

思いにかられていました。

ここで、初日じゃないんですけれども（初日についてはいろんなところでお話してきましたので、今日はその話をしません）、お寺に通いはじめて頂いた本の中の一節を皆さんに紹介したいと思います。その時は日本語がしゃべれなかつたので、英訳で読みました。『*Show of Buddha*（ブッダの叫び）』という題名の本です。日本語タイトルは『独立者の宣言』です。私には、「本当の自分を知られたらみんなに逃げられてしまう」という、ものすごい自己中心性、自己執着性があったんですけれども、この文章に触れて、何と言いましようか、一つの解放感を覚えたんです。それまでの恐れ、それまでの自己中心的な囚われから解放された気がしました。読んでいきますと、

——自分の思想は思想であつて決して自分それ自身ではない。私は思想を自分ぢやと思つてゐたことがありますが、とんでもないまちがひをしたものだと思つてゐます。

——自分の経験は経験であつて決して自分それ自身ではありません。私は経験を自分ぢやと思つてゐたことがありますが、とんでもないまちがひをしたものだと思つて



おます。  
（『独立の宣言』『暁烏敏全集』（涼風学舎）第一二卷三〇七頁・以下同）

僕は大学に行つて、哲学や思想史を学びましたので、ずいぶんと自分の思想に自惚れていました。確固たる自分の思いが大事だと思い、それに執着していました。また自分がしてきたいろんな経験が、自分をこのダメな私にしているのだと思っていました。酔っぱらつて帰つてきた時に母に怒られたこととか、十四人兄弟の末っ子として生まれてきたこととか、アルコール依存症の姉と暮らしたこととか、その様々な経験がこの自分を形成して、当時の思いから言うと「人生がめっちゃくちゃにされている」と思っていました。他の人はそんな経験ないですよ。友達はみんな家にアル中がいるわけじゃない。友達は元気に学校に行つて、家に帰つたら、おやつを食べたり、テレビを見てたりしてたんでしょ。けど、僕は酔っぱらつて気絶している姉と同じ部屋で宿題をやっていました。そういう経験が私を形成している、その経験によつて私はダメにされている、と思っていました。でもこの暁烏先生の文章は、そういう思想や経験は自分の全てでもなければ、自分を決定するものでもない、ただの思いや経験に過ぎないということを教えて下さいました。

また、同じことを暁烏先生は「感情」についてもおっしゃっています。

——感情は感情であつて自分それ自身では決してないのであります。私は感情を自分でちやと思つてゐたこともありますが、とんでもないまちがひをしてゐたと気づいてゐます。

感情についても、意志についても、願望についても、行為についても、それが、自分それ自身だというふうに考えることはあるけれども、それはとんでもない間違いだと暁烏先生はおっしゃつています。これを見て、僕のそれまでの「守らなければならぬ自分」「隠さなければならぬ自分」「装わなければならぬ自分」、それだけじゃないよね、ということに気づいて、諭されたわけです。ずっと囚われていた自分から、一段落、解放されるようなものを見方をいただきました。先生は「自分それ自身の思想、経験、感情、意志、願望、行為に自己を表現することもあります、これ等の全てを打砕いて出ることもあります」と述べておられます。思想、経験、感情、意志などに囚われずに、常に新しくなつてゐる自分があるわけです。以前に経験したこと、以前の感情、以前決めたことを打ち破つて、それ以上のものが表現されることもあるのだということです。

思想、経験、感情、意志、願望、行為は、たいてい頭の中に収まるぐらいのものですよ

ね。みなさんはどうですか。「自分が何なのか」を考えることはありますか。通常、生きている時に思うことのほとんどは「私は、私は、私は……」、「俺は、俺は、俺は……」、「英語で言う「I」から始まりますね。そういうふうにならずと発言している頭の中の声が「私」だと思ふことはありませんか。それが私の全てだと思うことは、僕は多々あるわけです。「I want to.」私はこうしたい、または「I will.」私は必ずやるんだと、頭の中の小さい私に囚われている。そして、その声はあんまり優しい声じゃないんです。周りを軽蔑し、自分が理想に達していない時には「お前、バカだ」と自分に言い聞かせる声ですから、それが自分の全てだと思うと非常に苦しいです。餓鬼道にしか生きられないです。僕は、暁烏先生のこの言葉に触れて、それ以上の自分があるんだと、あの小さい声に囚われなくてもいいんだというメッセージを受け取りました。

それに加えて暁烏先生がすごいことをおっしゃっているんです。

——自分それ自身は他に対して自分を局分するやうな概念的なものではなくて、

私たちは、「私」を概念化して、いつも私と他の人々を、誰が上で、誰が下か、と見極め

ようとしています。彼、彼女と私を概念化して比較していく。でも概念化の上でしか比較は成り立たないんですね。私と子どもの時の友達を比べてみても、概念の私と概念の彼らで、決して現実味のあるものではありません。「私」は一言で言い表せるものではないんです。私が考えた私、守ろうとしていた私は、どこまでも私が考え出した私であって、実際の私ではないんです。これは最近言うようにしていますけれども、皆さんは僕のことを、僕より、より客観的に見れるわけです。僕は自分の背中を見たことがあります。背中を見たことがないのに、「私は、私は、私は……」と、概念化しようとしている。私はこういう人、私は優しい人、私は悪い人、私はあの人より良い人、あの人より悪い人……、そればかり概念化して考えている。けれども、実際、みんなは自分の背中すら見たことがないんだから、「私はこうだ」と言えないんじゃない？　そういう問題がありますよね。

じゃあ、仏教の伝統の中で「私は何なのか」となると、暁烏先生の次の言葉が出てきます。

——唯我独尊にして、全宇宙を包摂するものであります。

これもすごく難しい言葉に聞こえますけれども、「唯我独尊」は「ただ我、独り尊し」と読みます。友達と比べて、自分が良い、自分が悪い、ということとは、この唯我独尊を無視したものです。皆さんは授業で聞いているかどうかわかりませんが、これは仏陀、お釈迦様が生まれてきた時の叫びです。「ただ我、独り尊し」と叫んだんです。

我々は、一人ひとり比べられない、独自の存在です。私はシカゴ郊外のオークパークという町の、ある産院で、一九七六年一月四日の一二時五九分に生まれました。皆さんも出産証明書を見れば時刻まで書いてあるんですけど、あの時刻に、あの場所で、あの部屋で生まれた人は他に誰もいません。誰一人いないわけです。背景も違う、家族も違う、生まれた場所、生まれた時間も違う人と、どうして概念化して比べることができるのか？ということを表すのはこの「唯我独尊」という言葉です。私たちは一人ひとり、事実として、存在として尊いものだと、いうことを意味します。その場所でその時間に生まれたことは誰とも代わることでできない出来事です。代わることでできない一人の生まれです。存在として尊いものがそこに生まれたわけです。その存在の尊さは、人間だからとか、そういうことではないんです。この宇宙で代わり得ない存在者として存在し始めていくということが尊いんです。

我々はものを見るときに、例えば、今いる部屋の中にはいっぱい似たような椅子が並んでいます。同等の価値だろうと思うんですけども、よく考えれば同じじゃないですよ。今、存在としてこの台は一つです。代われないものです。貴重なものです。似たような台があるかもしれない。でも、この台は全宇宙に一つしかありません。宇宙に、この私も一つです。あれをしたからとか、これを成し遂げたからとか、そういうことで尊いのはありません。この私の尊さと、この台の尊さと、あの椅子の尊さは実は等しいんですね。時間が限られている中でこれを説明すると皆さんちよつと困惑すると思いますが、そういう存在の平等の価値ということを「全宇宙を包摂するものである」という言葉で言われています。

たぶん皆さんは、自分が全宇宙を包摂しているなんて考えていないと思います。でも、全宇宙が、今、そこでそうしてなければ、尊いこの私は決して存在し得ません。私は北区の大谷大学から右京区の光華女子大学にタクシーに乗ってやって来ました。今日、私がここでこの話をするために光華女子大学は右京区のここになければなりませんし、同時に北区の大谷大学がそこになければ、この動画の作成はあり得ないんですね。このシカゴ出身のアメリカ人が大谷大学からやってくるためには、シカゴがそこにそうしてなければなら

ないですし、そこに僕の家族がいなければならぬわけです。生んだ母もいなければならぬですし、兄弟たちもいなければならぬ。私の祖先がアイルランドで暮らしたように暮らさなかったならば、今私がここにこうしているわけがないんですね。もっと言うと、アイルランドがアイルランドの場所にあるためには、アフリカが地球上のアフリカの場所になければならない。太陽が照っていないければアイルランドに人は生まれてこないのです。太陽が地球からちょうど良い距離になれば、今私がここでこうしてあるわけがないんですね。全宇宙がそこにそうしてなければ、この私が生まれてきて、遍歴を重ねて、皆さんとご縁を頂戴することはなかったわけです。そういう意味で、特定の場所で、特定の存在として、代わり得ない存在として生まれてきた私が、全宇宙によって、ここに、こうあらしめられているわけです。皆さんが今、どこでこの動画を見ているかはわかりませんが、皆さんも、皆さんも、全宇宙によって、そこでそうあらしめられています。全宇宙がそうでなければ、皆さんがそこに同じ形でいることはあり得ないわけです。

昔のSF小説で、遠い過去、何万年も前の地球にタイムトラベルできる話がありました。その旅先で一人が蝶々を一羽殺したんですけど、帰ってくると、その一羽の蝶々のために現代がすっかり変わってしまったというお話があります。それがこの事実を示し

ている物語です。全宇宙の全歴史の結果として、私たちが今ここにこうしてあるわけですね。そう考えると、小賢しい私、小さく概念化して考えていた私は、ある意味でどうでもよくなりますね。

私がこうしてあるということ、世界が完全に繋がりにあるということ、世界の全ての存在者に貴重な、無上の価値があるということ。そういう眼差しで見れば、この身を頂いたのは恨むべきものでもないですし、辛い経験をしたのも決して恨むべきものではありません。自分を育てるものすごく素晴らしい世界のはたらきが、いつも自分を作り出して、歩ませてくださっています。実は深いところで、人間はそういう形で自分と世界を見たいと願っているんですね。

——自分それ自身はこんなものであると私が口にし、筆にすることのできぬほど微妙に不可思議のものであります。私は常にこれに接触し、これに信順して、真実の生活をして行くのであります。

こういう言葉に触れて、私は何を願って、何を目指して生きるべきなのかということがは



つきりしてきました。

このように自分を見る広い視点をいただくと、「愛されたい」というのは別にどうでもいいんですよ。愛されても、愛されなくても、このかけがないの、代わり得ない存在は本当に尊いんですから。他の人がどう思っても良いんです。そういう大きな宇宙のはたきで育てられる自分を生きていけばいいんです。その大きなはたきを、この小さい身を持つて少しでも豊かにできればそれで良いんですね。私はそういう方向の願に生きていくようにしています。自己中心的な恐れに基づく以前の破滅方向と正反対ですから、苦しみなながらも日々、楽しく生きております。

今日は、皆さんとこういご縁を頂戴しましてありがとうございます。またいつか直接お目にかかれる機会を賜れば大変嬉しく思います。言いたいことはまだ山ほど残っています。以上にあたします。ありがとうございました。